



町田の
子ども食堂
その現状と「これから」

経済的な理由による栄養不足や孤食のフォローなどを目的として始まった『子ども食堂』が全国的に広がっている。町田市内でもこの10月にオープンしたばかりの『ふくちゃん食堂』(野津田)を含め、5ヶ所で運営されている。

町 田市の子ども食堂第1号として2016年6月にオープンした『ここに清風食堂』(金井)。高齢者福祉施設として50年以上の実績を持つ清風園がこの取り組みを始めたのは、民生委員の「困っている子どもたちにも門を開いてみては？」という打診がきっかけだった。その言葉に突き動かされた吉田施設長は僅か半年で開催にこぎつけた。開催は月2回、施



設職員や地域のボランティア、提携している玉川大学のゼミの学生も参加する。グループホームの高齢者と一緒に食べる部屋と子どもだけで食べる部屋の2つがあり、イベントも開催しながら、子どもが主役を掲げた食堂となつている。月1回、地域交流スペースで開催される「みんなでごはん」は、複数の団体に所属する有志が集まって自発的に設立、ボランティアが様々な得意分野を発揮することで運営されている。「異世代間の交流で子どもの社会性を育てる」という理念のもと、子どもたちの居場所として定着しつつある。

『コミュニティキッチン・山崎』は「元気な高齢者が地域の子どもの育てよう」という介護予防を切口にスタートした。社会福祉法人悠々会の陶山理事長は「共生社会と言われる現在、困りごとを抱えた人は地域で分け隔てなく支援したい」と語る。開催はまだ少ないが、効果も少しずつ実感できているという。

一方、貧困や孤食という側面でも危惧し、鶴川地区協議会の支援を受けながら、『コミュニティ食堂』というスタイルで運営される『コミュニティキッチン・鶴川』。食事はバイキング方式で、理由に関わらず困った子どもたちの居場所になれば、とNPO法人コミュニティフレンドがオープンさせた。

いずれも学習支援や遊びと組み合わせ、子どもの食事も無料もしくは100円。中には大人が参加できる食堂もあり開催時間は2〜5時間と様々な課題は運営サイドの人員確保や経費の捻出で、余った食品を持ち寄るフードドライブや地域の協力で辛うじて運営しているという。運営の方向性や開催の告知など見直すべき問題は山積しており、試行錯誤を重ねている状況だ。ただ、地域で子どもを育てようという社会貢献活動であることは間違いない。エリアの学校や社会福祉協議会と連携しながら子どもたちに豊かな食事と安心して過ごせる時間を提供できる場として、無理のない継続的な運営が期待される。



A.B. 小川の「みんなでごはん」。この日のメニューは回鍋肉や小松菜の中華風炒め、キャベツとワカメの酢の物など、野菜もたっぷり。対応人数の限界に達している盛況を笑顔で支えるボランティアスタッフの皆さん。 C.D.「コミュニティキッチン・山崎」では悠々園のスタッフが調理している。大人の利用も可能だ。 E.「コミュニティキッチン・鶴川」では日中営業しているカフェの料理も取り入れながら費用の捻出を抑えている。 F.G.「ここに清風食堂」では6種類のメニューを繰り返して提供する。献立炊爨やお月見、ハロウィンなどのイベントも行う